

## 鮑照「学劉公幹体五首」考：六朝宋における五言八句詩

土屋， 聡  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9620>

---

出版情報：中国文学論集. 30, pp.1-18, 2001-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：

# 鮑照「学劉公幹体五首」考

——六朝宋における五言八句詩——

土屋 聡

はじめに

所謂永明体と言えば、

永明末、盛爲文章。吳興沈約・陳郡謝朓・琅邪王融以氣類相推轂。汝南周顒善識聲韻。約等文皆用宮商、以平上去入爲四聲、以此制韻、不可增減。世呼爲永明體。

永明の末、盛んに文章を爲る。吳興の沈約・陳郡の謝朓・琅邪の王融 氣類するを以て相推轂す。汝南の周顒 善く声韻を識る。約等の文皆宮商を用ゐ、平上去入を以て四声と爲し、此を以て韻を制し、増減すべからずとす。世呼びて永明体と爲す。

〔南齊書〕陸厥伝

とある如く、南齊の沈約・謝朓・王融らによって提唱され、詩の韻律の調和を至上命題とするものとして知られているが、彼らはまた五言八句形式の短詩型を好んだ。

興膳宏氏は「五言八句詩の成長と永明詩人」において、詩人同士が共通のテーマを設定して唱和・競作する際に五言八句形式が取り上げられていることから、これを永明派詩人の集団制作の場における共同の「即興的な創作様式」であるとされ、また連作詩の多い王融を挙げて「同じ主題を多様な角度から描く連作詩」にも程良い長さであった、と言っておられる。

鮑照「学劉公幹体五首」考

確かに五言八句形式は永明期以降に隆盛を見るのであるが、この短詩型は彼らの独創ではない。数こそ少ないものの永明期以前にも五言八句の詩は試みられていたのである。興膳氏は五言八句の贈答詩の例として鮑照「贈故人馬子喬六首」其一・其二及び「答休上人」詩を挙げ、また連作詩の例として顔延之「五君詠五首」・陶淵明「讀山海經十三首」を挙げておられるが、筆者はここで、もうひとつの五言八句で統一された連作詩に注目したい。鮑照「学劉公幹体五首」である。

劉宋時代の詩人鮑照の「学劉公幹体五首」は、建安七子のひとりに数えられる劉楨の「体」に「学」ぶと称し、現存する鮑照の詩集では五首の連作詩とされている。

本稿では鮑照「学劉公幹体五首」が五言八句で統一されていることに注目し、その文学史的位置付けについて検討したい。

一

ここで「学劉公幹体」とはどのような詩であるか確認しておきたい。次に掲げるのは五首の其一詩である。

其一

欲宦乏王事	宦 <sup>つか</sup> へんと欲するも王事に乏しく
結主遠恩私	主に結ぶも恩私に遠し
爲身不爲名	身を為むるは名の為ならず
散書徒滿帷	散書 徒らに帷に滿つ
連冰上冬月	冰を連ぬ 上冬の月
披雪拾園葵	雪を披きて園葵を拾ふ
聖靈燭區外	聖靈 區外を燭すも
小臣良見遺	小臣 良に遺てらる

この詩は、才能に乏しいために主君の恩顧がなかなか得られないことを嘆く内容である。仕官しようと望んだが公務をこなす能力もなく、いざ主君に仕えることになっても、その恩顧を得るには遠い。帷を下ろして勉学に励んだ董仲舒に倣って学問を積んできたが、書物は遂に身に付かず、意味もなく帳の内に散らかっている。季節は初冬十月、積もった雪をかき分けてその下に生えている「園葵」を拾う。天子の威光は世界の果てを照らすけれども、その光は私のいる場所を照らすことがなく、私は本当に捨て去られたままである。

第六句の「園葵」が劉楨「贈從弟三首」其一（『文選』卷二十三）に見えることに注意したい。

汎汎東流水 汎汎たり東して流るる水

磷磷水中石 磷磷たり水中の石

蘋藻生其涯 蘋藻は其の涯に生じ

華紛何擾濁 華は紛として擾濁たり

采之薦宗廟 これを采りて宗廟に薦め

可以羞嘉客 以て嘉客に羞む可し

豈無園中葵 豈に園中の葵無からん

懿此出深澤 此の深沢より出づるを懿す

この詩は、ひとり孤高を守って野にある從弟を励ますものである。ここでは從弟を蘋藻に喩え、「庭園の中の葵があるけれども、しかしこの素晴らしい深沢の蘋藻には敵わない」と言う。劉楨詩に対して李善注は樂府古辭「長歌行」を挙げ、「葵」は秋になれば色つやが衰えるものであり、時を経れば落ちぶれてしまう存在であることを示している。

鮑照詩では、秋を過ぎて、もう初冬なのである。雪の下の「葵」が無惨に枯れ果ててしまったものであることは想像に難くない。つまり、この「園葵」は才能に乏しく学問も途中で投げ出してしまった「小臣」の姿を象徴しているのである。

次に其二詩では、荒野の孤独な柏樹の姿が描かれる。

其二

噫噫寒野霧

噫噫たり寒野の霧

蒼蒼陰山柏

蒼蒼たり陰山の柏

樹迴霧縈集

樹は迴かにして霧縈集まり

山寒野風急

山は寒くして野風急なり

歲物盡淪傷

歲物尽く淪傷し

孤貞爲誰立

孤貞 誰が為にか立つ

賴樹自能貞

賴さいはひに樹は自ら能く貞にして

不計迹幽澗

迹の幽澗たるを計らず

どんよりとした濃霧が寒々しい荒野を覆っている中、山の北側に一本の柏樹が立っている。遠くに見える柏樹はやはり濃い霧に覆われ、山には冷たい風が吹きつけている。

この柏樹は周囲の草木が枯れ凋んでも「貞」を失わずに立っているが、それは柏樹が生来持っている性質に因るものと解釈されている。『論語』子罕篇に「子曰、歳寒然後知松柏之後彫（子曰く、歳寒にして然る後 松柏の後彫を知る）」とある如く、厳しい寒さの中であって他の草木が全て枯れてしまっても、「松柏」だけは枯れることなく踏みとどまっているものなのである。このような松柏のイメージを詠じたものが劉楨「贈從弟三首」其二（『文選』卷二十三）である。

亭亭山上松

亭亭たり山上の松

瑟瑟谷中風

瑟瑟たり谷中の風

風聲一何盛

風声 一に何ぞ盛んにして

松枝一何勁

松枝 一に何ぞ勁き

冰霜正慘愴

冰霜は正に慘愴なるも

終歲常端正

終歲 常に端正なり

豈不羅凝寒 豈に凝寒に羅らざらんや

松柏有本性 松柏 本性を有つ

この詩は従弟を松になぞらえて、苦しさの中にも揺るぐことのない節操を讃えたものである。松は谷間から吹く風にさらされ、霜に苦しめられているが「端正」さを保っている。決して厳しい寒さに襲われたいわけではないのであるが、「松柏」は生来の高潔さを貫く強さを持っている。劉楨は従弟にそうした強さを見出し、これを讃えているのである。

鮑照詩に描かれた柏樹の姿は、この劉楨「贈従弟三首」其二を踏まえたものである。ところが鮑照詩では「一体、誰のために貞節を守るのか」と、貞節であることに対して懐疑的であり、ただ霧に覆われて孤独にいる疎外感だけが残るのである。

続く其三詩においては「朔雪」が「胡風」に吹かれて主君の前に現れる。

其三

胡風吹朔雪 胡風 朔雪を吹き

千里度龍山 千里 龍山を渡る

集君瑤臺上 君が瑤臺の上に集ひ

飛舞兩楹前 兩楹の前に飛舞す

茲晨自爲美 茲の晨に自ら美を爲すも

當避豔陽天 當に豔陽の天を避くべし

豔陽桃李節 豔陽 桃李の節は

皓潔不成妍 皓潔も妍を成さず

胡地の風に吹きつけられた北方の雪は、千里の彼方から龍山を越えてやって来た。玉飾りの臺に集まり、玉座の前で舞い飛ぶ。

ここまでは「朔雪」が主君の恩顧を受けて今をときめいているように描かれるが、それは一時的なものに過ぎな

いのである。

持て囀されているうちは「両楹の前に飛舞」していられるのであるが、しかし「朔雪」の立場は主君の嗜好に左右される極めて不安定なものであると言える。其三詩では雪に比喻して「雪は冬の間こそ美しい景観となりうるが、春になれば桃や李のみごときに取って代わられてしまい、その白い清らかさも嘉せられることはない」と、一時の隆盛が結局頼りないものであるとする自戒が見られるのである。仕官して一時の隆盛を得ても、やがて疎まれるようになる。このような危惧は続く其四詩にも見られる。

其四詩では御殿の庭の池に生えた「荷」が詠ぜられる。

其四

荷生潦泉中

荷は生ふ潦泉の中

碧葉齊如規

碧葉齊しきこと規の如し

迴風蕩流霧

迴風 流霧を蕩かし

珠水逐條垂

珠水 條を逐ふて垂る

彪炳此金塘

此の金塘に彪炳として

藻耀君玉池

君の玉池に藻耀たり

不愁世賞絶

世賞の絶ゆるを愁へず

但畏盛明移

但だ畏る盛明の移るを

ハスは清らかな泉の中に生え、その緑の葉は綺麗に整っている。つむじ風に乗って霧はたゆたい、玉のような水滴が葉脈に沿って垂れ落ちる。このハスは、主君の立派な池やその堤に輝かんばかりに咲いているのである。

なお、劉楨「公讌」詩に「芙蓉散其華 菡萏溢金塘（芙蓉 其の華を散らし 菡萏 金塘に溢る）」という句があるが、第六句まで描かれたハスの花の姿はまさに劉楨詩のこの句を踏まえて敷衍したものである。第五句の「金塘」という語は、劉楨「公讌」詩に一例ある以外、鮑照以前の現存する作品には他に用例がないのである。

このハスの花は「金塘に彪炳と」、また「君の玉池に藻耀」と咲いているのであるが、ここでもやはり主君の恩

顧を享受し続けることは許されない。末二句は、盛んな時が移ろいゆき、やがて訪れるであろう凋落の予感に恐れを抱いていることを言うのである。

其四詩のこのような構成は、鮑照の「芙蓉賦」と同様のものである。「芙蓉賦」はやはりハスの花を題材にしたものであるが、それまで言葉を尽くしてその美しさを描写しておきながら、唐突に現れる「雖凌群以擅奇、終從歲而零歇（群を凌ぎて以て奇を擅にすると雖も、終に歳に従ひて零歇す）」という末二句によって、読者は、咲き誇る現在の美しさもやがて時を経れば衰えてしまふ運命に、否応なく気付かされてしまうのである。其四詩で「世人に評価されなくなるのは構わないが、ただこの盛んな時が移ろいゆくのを恐れる」と言うのも、同様の運命観に立つて詠ぜられたものである。

既に其一詩において落ちぶれた姿が提示されていたが、このような危惧は、やがて現実のものとして其五詩の「細草」に襲いかかるのである。

### 其五

白日正中時 白日 正中の時

天下共明光 天下 明光を共にす

北園有細草 北園に細草有り

當晝正含霜 晝に当たるも正に霜を含む

乖榮頓如此 榮えを乖なれること頓にはがなること此くの如く

何用獨芬芳 何を用てか独り芬芳たる

抽琴爲爾歌 琴を抽ひきて爾の為に歌はんとするも

絃斷不成章 絃断たれて章を成さず

白く輝く太陽が南中している時、天下はその明るい光を共に浴びる。ところが北の庭園に細々と生えている草は、昼間だというのに霜が降りている。

「白日」は、「古詩十九首」其一（『文選』卷二十九）の「浮雲蔽白日（浮雲 白日を蔽ふ）」の句の李善注が「浮

雲之蔽白日、以喻邪佞之毀忠良（浮雲の白日を蔽ふとは、以て邪佞の忠良を毀るに喩ふ）と解する如く、主君（皇帝）を輝やく太陽に喩えた比喻表現である。天子の威光は天下を明るく照らすものであるのだが、「北園」に生えている「細草」は昼間だというのに霜が降りている。

ここで想起されるのが陸機「園葵詩」（『文選』卷二十九）に描かれた「葵」の姿である。「種葵北園中 葵生鬱萋萋（葵を種う北園の中 葵は生ひて鬱として萋萋たり）」とある如く、陸機詩の「葵」も「北園」に植えられたものであり、「曾雲無温液 嚴霜有凝威（曾雲に温液無く 嚴霜に凝威有り）」と、恵みの雨も降らず、厳しい霜に脅かされているのである。其一詩には雪に埋もれた「園葵」が登場していたが、其五詩における「細草」も同様に疎外された日陰の存在なのである。

そして、この「細草」に対する作者鮑照自身の言葉として、「琴を取り出してお前のために歌おうとしても、絃は断ち切れて、もう歌うことが出来ない」と結ばれる。

以上見てきた如く、「学劉公幹体五首」とは、雪の下に埋もれた「園葵」（其一）、深い霧に覆われた孤独な「柏」（其二）、春が来れば去らなければならない「朔雪」（其三）、盛んな時が移ろいゆくのを恐れる「荷」（其四）、「白日」の光を受けられない「細草」（其五）などに比喻して、仕官してもやがて捨て去られてしまう自己の境遇を詠じたものである。そして其五詩の結びでは「抽琴爲爾歌 絃斷不成章（琴を抽きて爾の為に歌はんとするも 絃断たれて章を成さず）」と詠じ、それまでの比喻を用いたスタイルを鮮やかに結んでいる。このような構成の「学劉公幹体五首」は、其一詩と其五詩が全体の序章と終章の役割を持ち、多様な角度から比喻を用いて不遇な寒土の半生を描くという、鮑照が綿密に計算して一時に詠じた連作詩であったものと考えられるのである。

二

鮑照が「学」んだ劉楨は建安七子のひとりに数えられているが、鮑照はなぜ他の建安詩人ではなく、劉楨という詩人を取り上げたのであろうか。筆者はここで五言八句という詩の長さに注目したい。劉楨以外の建安詩人の作品

の中にも、五言八句詩は多い。現存する建安詩人の作品を見る限り、五言八句詩には次のようなものがある。<sup>(13)</sup>

王粲「詩(失題)」(『藝文類聚』卷二十八 人部 遊覽)

「詩(失題)」(『藝文類聚』卷九十 鳥部上 鸞)

「詩(失題)」(『藝文類聚』卷九十二 鳥部下 鳩)

劉楨「贈從弟三首」(『文選』卷二十三)

「詩(失題)」(『藝文類聚』卷八十八 木部上 木)

徐幹「答劉楨」(『藝文類聚』卷三十一 人部 贈答)

阮瑀「公讌」(『初學記』卷十四)

「詩(失題)」(『藝文類聚』卷二 天部下 雨)

「詩(失題)」(『藝文類聚』卷十八 人部 老)

「詩(失題)」(『藝文類聚』卷二十七 人部 行旅)

「詩(失題)」(『藝文類聚』卷三十六 隱逸 上)

応場「別詩二首」其一(『藝文類聚』卷二十九 人部 別 上)

曹丕「詩(失題)」(『太平御覽』卷三百五十三)

曹植「贈白馬王彪七章」其二(『文選』卷二十四)

「雜詩七首」其四(『文選』卷二十九)

「詩(失題)」(『藝文類聚』卷九十 鳥部上 玄鵠)

しかし、これらのうち五言八句で統一した連作詩は劉楨「贈從弟」三首だけである。

その後、五言八句で統一して詠ぜられた連作詩には、陶淵明「誦山海經十三首」と顔延之「五君詠五首」がある。陶淵明「誦山海經十三首」は全体の序章に当たる其一詩のみが十六句からなるが、他の十二首は全て五言八句である。顔延之「五君詠五首」は、阮籍・嵇康・劉伶・阮咸・向秀の五人について詠じたものであるが、こちらは五首ともに五言八句である。これらの作品が存在することから、五言の連作詩を同じ句数、しかも八句で統一するとい

鮑照「學劉公幹體五首」考

う発想は既にあったと言えるが、現存する作品から見る限り、その最も早い例が劉楨「贈従弟三首」なのである。本稿では第一章において、「学劉公幹体五首」が連作詩であるのか、ということについて検討し、その構成から見て連作詩であることを明らかにした。「学劉公幹体五首」が五言八句で統一された連作詩であるということは、他ならぬ劉楨「贈従弟三首」に倣うことによって短詩型にすることに意義を見出していたのではなからうか。次に劉宋時代に到るまでの五言八句詩の流れについて検討してみたい。

三

本来一篇の詩を詠ずるに当たっては、『文心雕龍』章句篇に「夫裁文匠筆、篇有小大。離章合句、調有緩急。隨變適會、莫見定準（夫れ文を裁し筆を匠するに、篇に小大有り。章を離ち句を合するに、調に緩急有り。変に隨ひ會に適し、定準を見る莫し）」とある通り、一定の基準があるわけではなかつた。また「句司數字、待相接以爲用。章總一義、須意窮而成體（句は數字を司り、相接するを待ちて以て用を爲す。章は一義を総べ、意窮るを須ちて体を成す）」とあり、一首の句数は内容次第で自由に決定されるべきものであつた。

例えば「古詩十九首」では二十句のものが二首、十八句のものが一首、十六句のものが五首、十四句のものが二首、十二句のものが一首、十句のものが六首、八句のものが二首など一首ごとの長さはまちまちである。

その後、建安時代においては大まかな句数を整える傾向が現れる。例えば全七章から成る曹植「贈白馬王彪」詩の各章の句数は、十句（其一）・八句（其二）・十二句（其三）・十二句（其四）・十四句（其五）・十二句（其六）・十二句（其七）であり、一定の句数に整えられているわけではないが、十二句程度を基本としているのである。なお、これらの例を見る限り、八句という長さは最も短いものであると言える。

ところで、このような句数を整える傾向がよりはっきりと現れたものが、西晋時代の四言詩である。就中、四言の贈答詩は、潘岳「爲賈謐作贈陸機十一首」詩（『文選』卷二十四）や陸機「答賈長淵十二首」詩（『文選』卷二十四）、潘尼「贈陸機出爲吳王郎中令六首」詩（『文選』卷二十四）など、換韻することによって一章八句の形に統一

されているのである。<sup>15)</sup>このような四言詩の傾向は劉宋時代にも受け継がれていった。謝靈運の「贈從弟弘元時為中軍功曹住京」詩(『文館詞林』卷百五十二)は五章全てが四言八句であり、同じく「答謝諮議」詩(『文館詞林』卷百五十八)も八章全てが四言八句である。

劉宋時代には、加えて五言詩にもこの傾向が現れる。このことについては、次のような作品を例として挙げるこ  
とが出来た。なお、紙幅の都合上、訓読は省略する。

謝靈運「西陵遇風獻康樂」詩(『文選』卷二十五)

我行指孟春 春仲尚未發<sup>a</sup> 趣途遠有期 念離情無歇<sup>a</sup> 成裝候良辰 漾舟陶嘉月<sup>a</sup> 瞻塗意少惊 還顧情多闕<sup>a</sup>  
哲兄感此別 相送越峒林 飲餞野亭館 分袂澄湖陰 悽悽留子言 眷眷浮客心 迴塘隱鱸棧 遠望絕形音<sup>b</sup>  
靡靡即長路 戚戚抱遙悲 悲遙但自弭 路長當語誰 行行道轉遠 去去情彌遲 昨發浦陽汭 今宿浙江湄<sup>c</sup>  
屯雲蔽曾嶺 驚風涌飛流 零雨潤墳澤 落雪灑林丘 浮氛晦崖巘 積素惑原疇 曲汜薄停旅 通川絕行舟<sup>d</sup>  
臨津不得濟 佇楫阻風波 蕭條洲渚際 氣色少諧和 西瞻輿遊歎 東睇起悽歌 積憤成疾疴 無營將如何<sup>e</sup>  
a 記号は入声月韻(『広韻』韻目による。以下同)、Bは平声侵韻、Cは平声脂韻、Dは平声尤韻、Eは平声歌・戈韻であり、換韻することによって一章が八句になっていることが明白である。

この詩を贈られた謝靈運は、やはり同じ形式の詩でこれに答えた。

謝靈運「酬從弟惠連」詩(『文選』卷二十五)

寢瘵謝人徒 滅迹入雲峯 巖壑寓耳目 歡愛隔音容<sup>f</sup> 永絕賞心望 長懷莫與同 末路值令弟 開顏披心胸<sup>f</sup>  
心胸既云披 意得咸在斯 凌澗尋我室 散帙問所知 夕慮曉月流 朝忌曠日馳 悟對無厭歡 聚散成分離<sup>g</sup>  
分離別西川 迴景歸東山<sup>h</sup> 別時悲已甚 別後情更延 傾想遲嘉音 果枉濟江篇 辛勤風波事 款曲洲渚言<sup>i</sup>  
洲渚既淹時 風波子行遲 務協華京想 詎存空谷期 猶復惠來章 祇足攬余思 儻若果歸言 共陶暮春時<sup>j</sup>  
暮春雖未交 仲春善遊遨 山桃發紅萼 野蕨漸紫苞 鳴嚶已悅豫 幽居猶鬱陶 夢寐行歸舟 釋我吝與勞<sup>k</sup>  
Fは平声東・鍾韻、Gは平声支韻、Hは平声元・山・仙韻、Iは平声脂・之韻、Jは平声肴・豪韻である。  
この二首の五言詩は、名門謝家の一族同士という近い間柄の謝靈運・謝靈運の間でやりとりされた贈答詩であ

るが、詩人同士の間では、一方が工夫を凝らした作品を詠じたならば、他方は更にその上を行く工夫を凝らす。謝靈運は、謝惠連から贈られた「西陵遇風獻康樂」詩に答えるに当たって、八句で換韻するのは勿論のこと、章末の「心胸」・「分離」・「洲渚」・「暮春」という語を次章の冒頭で繰り返すという所謂蟬聯体を用いることによって、八句をひとつの単位とすることを強調しているのである。してみれば、謝惠連・謝靈運らには、一章八句という簡潔な長さにすることを、積極的に評価する意識があったと言える。

これらの詩が存在することによって、劉宋時代には五言詩においても八句という長さを、ひとつのまとまりとして評価する意識があったことが明らかになった。

鮑照の「学劉公幹体五首」は、このような流れを承けて詠ぜられたものである。鮑照が敢えて劉楨を取り上げ、その「贈從弟三首」の形式に倣ったことも、それが八句という簡潔な長さで統一された連作詩であったからに他ならない。「学劉公幹体五首」は不遇な寒士の姿を描いたものであったが、同様に寒士の半生を綴った作品には五言二十八句から成る「代東武吟」があり、そのような内容には比較的長い形式を要するものと思われる。しかし、この「学劉公幹体五首」は、五首を組み合わせた連作詩とすることで一首を八句に縮めることに成功した。これは鮑照が劉楨「贈從弟三首」に「学」ぶこと<sup>16</sup>によって、南齊時代に先駆けて、いわば最新のスタイルで、失意に沈む「寒門」の姿を詠じることが出来た、と言える。

#### 四

劉楨の文学作品、特に五言詩に対する評価は高い。早くには曹丕の「与呉質書」(『文選』卷四十二)の中で「其五言詩之善者、妙絶時人(其の五言詩の善き者、時人に妙絶す)」と評価された。鍾嶸『詩品』では劉楨を上品に置いたばかりではなく、曹植に次ぐ五言詩の名手という評価が与えられている。その劉楨の「贈從弟三首」が八句で統一されていることには、何らかの意図があったと見て間違いない。

『文心雕龍』定勢篇には、

桓譚稱、文家各有所慕、或好浮華而不知實覈、或美衆多而不見要約。陳思亦云、世之作者、或好煩文博採、深沈其旨者。或好離言辨句、分毫析釐者。所習不同、所務各異。

桓譚稱すらく、文家各おの慕ふ所有り、或ひは浮華を好みて実覈を知らず、或ひは衆多を美として要約を見ず、と。陳思も亦云く、世の作者、或ひは煩文博採して、其の旨を深沈にするを好む者あり。或ひは言を離ち白を辨ち、毫を分ち釐を析つを好む者あり。習ふ所同じからず、務むる所各おの異なれり、と。

という桓譚・曹植の言葉を引く。右によれば「衆多」・「煩文」と言う煩瑣で冗長な作品を好む者がいたことが窺われる。

ところが、同じく定勢篇では続けて、次のような劉楨の言葉を引いている。<sup>(18)</sup>

劉楨云、文之體勢貴強。使其辭已盡、而勢有餘、天下一人耳、不可得也。

劉楨云く、文の體勢は強きを貴ぶ。其の辭をして已に尽くるも、而るに勢をして餘り有らしむるは、天下一人のみ、得るべからざるなり。

右によれば劉楨は、言葉が尽きても勢いを残している、いわば餘韻というものを重んじていたことがわかる。それが彼の唱える文章の「體勢」における「強」さというものである。

『文心雕龍』では餘韻のことを「隱」と称している（隱秀篇）。「隱也者、文外之重旨者也（隱なる者は、文外の重旨なる者なり）」と言い、「隱以複意爲工（隱は複意を以て工と爲す）」と言うものである。要するに、餘韻とは言外の含意に富むことを指す。この劉楨の文学理論が短詩型の道を切り開いた、と筆者は考えるのである。勿論、単純に五言八句形式であれば餘韻が得られるというものではないが、徒らに言葉を費やして得られるものでもない。少なくとも、劉楨「贈從弟詩三首」の五言八句という短い形式は、桓譚・曹植らが言う所の「衆多」・「煩文」とは相容れないものである。

一方、鮑照の活躍した劉宋時代は、それまでの修辭主義の擡頭を承け、「儷采百字之偶、爭價一句之奇（采を百字の偶に儷べ、価を一句の奇に争ふ）」（『文心雕龍』明詩篇）と修飾の新奇さを「百字」という比較的長い形式の中で追いかける風潮があった。

かかる風潮の中にあつて、劉楨の「体」に「学」ぶ鮑照「学劉公幹体五首」は、寒土の不遇な様子を事細かに描写するのではなく、雪に埋もれた「園葵」や山の北側の「柏」に比喻して日の当たらない寒土の疎外感を表現し、また、春になれば消えてしまふ「朔雪」に比喻して後ろ盾のない寒土の不安定な立場を表現するものであつた。

五言八句という短詩型に、このような卓抜な比喻を盛り込んだ「学劉公幹体五首」こそ、言葉による表現が尽きても言外に寒土の姿を髣髴とさせるという、まことに「勢」のある作品なのである。

## 結び

以上、鮑照の「学劉公幹体五首」が劉楨「贈從弟三首」の五言八句形式に倣つたことの文学史的位付けについて論じてきた。吳小平氏の調査に拠れば、南齊時代における五言八句詩の五言詩全体に占める割合は約二十九%<sup>(2)</sup>であり、数量の面から考えれば、五言八句形式の盛行は南齊以降のこととして良い。しかし、その先蹤は既に劉宋時代の鮑照に認めて良いのではないであらうか。

『詩品』中品の沈約の項に「詳其文體、察其餘論、固知憲章鮑明遠也（其の文體を詳らかにし、其餘論を察するに、固より鮑明遠を憲章するを知るなり）」とあり、鮑照と永明派の間には影響關係があつたことが窺える。本稿では、建安期と永明期を結ぶものとしての鮑照「学劉公幹体五首」について検討したが、鮑照が永明派に与えた影響については今後の課題としたい。

## 注

(1) 興膳宏氏「五言八句詩の成長と永明詩人」(『学林』第二十八・第二十九合併号 一九九八年)を参照した。

(2) 毛斧季校宋本『鮑氏集』(『四部叢刊』初編所収)では巻四に収められている。なお本稿では同本を底本とし、黄節氏

『鮑參軍詩註』（一九五七年 人民文学出版社刊）及び錢仲聯氏『鮑參軍集注』（一九八〇年 上海古籍出版社刊）を適宜参照した。

(3) 『史記』儒林伝に「董仲舒、廣川人也。以治春秋、孝景時爲博士。下帷講誦、弟子傳以久次相受業。或莫見其面（董仲舒は、広川の人なり。春秋を治むるを以て、孝景の時に博士と爲る。帷を下ろして講誦し、弟子伝ふるに久次を以て業を相受す。或るひと其の面を見る莫し）」とあるのを踏まえたものである。董仲舒は帷を下ろして勉強していたため、古参の弟子が新弟子に教えていた。弟子の中にはその顔を見たことのない者もいた。

(4) 第七句に似た表現が劉楨「贈徐幹」詩に「仰見白日光 皦皦高且懸 兼燭八紘内 物類無頗偏 我獨抱深感 不得與抱之 與に焉に比ぶを得ず」とある。また、第八句は劉楨「贈五官中郎將四首」其四の「小臣信頑鹵 僮俛安能追（小臣は信に頑鹵なり 僮俛するも安んぞ追ふ能はん）」を踏まえた句である。「小臣」とは『書経』康誥に「不率大夏、矧惟外庶子訓人、惟厥正人、越小臣諸節（大夏に率はざる、矧んや惟れ外の庶子 人を訓ふる、惟れ厥の正人、越び小臣諸節）」とあり、これは平民でさえ法に背けば罰せられるのであり、まして官に就いている者はより重く罰せられることを言う。「小臣」は平民以上ではあるが、その身分は低い。鮑照は所謂「寒門」出身で官吏としての身分は低かった。「小臣良見遺」の「小臣」は作中人物の自称であるが、作者鮑照の境遇を反映させたものである。

(5) ここでの「葵」には「蘋藻」（従弟）の対比物としての役割が当てられているようである。鮑照には「園葵賦」（『鮑氏集』巻二）という作品があり、そこでも「顧董茶而莫偶、豈蘋藻之薦羞（董茶を顧みるも偶ぶ莫く、豈に蘋藻の薦羞せらるるあらんや）」と、「蘋藻」には及ぶべくもないことを言っている。なお、「豈無」は『詩経』衛風「伯兮」に「豈無膏沐 誰適爲容（豈に膏沐すること無からんや 誰をか適として容を為さん）」とある他、陶淵明「擬古九首」其七にも「皎皎雲間月 灼灼葉中華 豈無一時好 不久當如何（皎皎たり雲間の月 灼灼たり葉中の華 豈に一時の好しき無からんや 久しからざる当た如何せん）」という用例があり、先に或る事物を提示しておきながら、さらにその事物に対する否定的な見方を引き出す、という場合に用いられる。

(6) 古辞「長歌行」（『文選』巻二十七）に「常恐秋節至 焜黃華葉衰（常に恐る秋節の至り 焜黄して華葉の衰ふるを）」

鮑照「学劉公幹体五首」考

と秋の到来を恐れている姿が描かれる。

- (7) 「蒼蒼」の語は劉楨「公讞」詩に「月出照園中 珍木鬱蒼蒼(月出でて園中を照らし 珍木鬱として蒼蒼たり)」という用例がある。

- (8) 黄節氏はやはり劉楨「贈從弟三首」其二を挙げ、「明遠此篇蓋學之(明遠の此の篇 蓋しこれに学ぶ)」と言う(『鮑參軍詩註』一九五七年 人民文学出版社刊)。

- (9) 其三のみは『文選』卷三十一に「学劉公幹体一首」として収められている。

なお、其三だけが『文選』に収録されていることは、それ自体ひとつの大きな問題であるが、ここでは詳しく触れない。ただ『文選』収録の理由は、恐らく其三の韻律(平仄)を評価するものであろう、ということを指摘するにとどめたい。

胡風吹朔雪

千里度龍山

集君瑤臺上

飛舞兩楹前

茲晨自爲美

當避艷陽天

艷陽桃李節

皓潔不成妍

今、右に各句の第二字・第四字のみ『広韻』によって平仄を記したが、第三句・第五句が共に平声であるのを除けば、律詩の所謂二四不同の原則に則っているかのように見受けられる。且つ奇数句と偶数句の間で綺麗に平仄を反転させており、これは他の四首に比べて韻律面で遥かに整っていると言える。

『文選』が永明派の領袖沈約の「宋書謝靈運伝論」を反映して、音調諧和の作品を収録していることは、清水凱夫氏『『文選』編纂の目的と選録規準』(一九九九年 研文出版刊『新文選学』第四章)に詳しい。

(10) 李善注は、『楚辭』大招に「北有寒山、遼龍麓只（北に寒山有り、遼龍麓かなり）」とあり、その王逸注に「遼龍山名也（遼龍は山名なり）」とあるのを引き、地名であることを示す。

(11) 黄節氏はやはりこの句を挙げ、「此篇蓋申其意（此の篇蓋し其の意を申ぶ）」と言う（『鮑參軍詩註』一九五七年 人民文学出版社刊）。

(12) 其五詩の第一句・第二句も、劉楨「贈徐幹」詩の「仰視白日光 皦皦高且懸 兼燭八紘内 物類無頗偏 我獨抱深惑 不得與比焉（仰ぎ見る白日の光 皦皦として高く且つ懸し 兼ねて八紘の内を燭し 物類に頗偏する無し 我は独り深惑を抱き 與に焉に比ぶを得ず）」に似た表現である。

(13) 逢欽立氏『先秦漢魏晉南北朝詩』（一九八三年 中華書局刊）に拠った。

(14) 興膳宏氏「律詩への道——句数と対句の側面から——」（『東方学会創立五十周年記念東方学論集』所収 一九九七年）に既に指摘されている。なお、逢欽立氏『先秦漢魏晉南北朝詩』（一九八三年 中華書局刊）を用いて数えたところ、西晋時代の、一章が八句で統一された贈答（四言）詩は二十四首ある。

(15) この他、「贈從弟弘元」詩（『文館詞林』卷百五十二）は全六章のうち五章が八句、「答中書」詩（『文館詞林』卷百五十二）は全六章のうち五章が八句、「贈安成」詩（『文館詞林』卷百五十二）は全六章のうち五章が八句となつている。  
(16) 南斉初の永明二年（四八四）に、一篇の詩の長さはどのくらいが適當であるのか、ということについての論議があった。それは、次のような上奏文によって明らかである。

永明二年、尚書殿中曹奏、（略）又尋漢世歌篇、多少無定、皆稱事立文。並多八句、然後轉韻。時有兩三韻而轉、其例甚寡。張華・夏侯湛亦同前式。傅玄改韻頗數、更傷簡節之美。近世王韶之・顏延之並四韻乃轉、得賒促之中。云々

永明二年、尚書殿中曹奏す、（略）又漢世の歌篇を尋ぬるに、多少 定まり無く、皆 事を稱へて文を立つ。並びに八句多く、然る後 韻を転ず。時に兩三韻にして転ずる有るも、其の例甚だ寡し。張華・夏侯湛も亦前式に同じくす。傅玄 韻を改むること頗る數しはなれば、更に簡節の美を傷る。近世の王韶之・顏延之は並びに四韻にして乃ち転ずれば、賒促の中を得。云々

鮑照「学劉公幹体五首」考

傅文の歌辞は頻繁に換韻するため「簡節之美」を損なう、と言う。逆に王韶之・顔延之は四回押韻してから換韻するため「賒促之中」、すなわち緩急の中正を得るのである。八句という長さが簡潔で長くもなく短くもなく適正な長さである、とする考え方がここに見られる。

- (17) 鍾嶸『詩品』序に「昔、曹・劉殆文章之聖、陸・謝爲體貳之才。銳精研思、千百年中、而不聞宮商之辨・四聲之論（昔、曹〔植〕・劉〔楨〕は殆ど文章の聖、陸・謝は体貳の才爲り。鋭精研思なること、千百年中なるも、而るに宮商の辨・四声の論を聞かず）」とあり、また上品の劉楨の項に「然自陳思已下、楨稱獨歩（然るに陳思より已下、楨独歩と称せらる）」とある。

- (18) 桓譚・曹植・劉楨らのこれらの語はその出典が明らかでないため、『文心雕龍』に引用されたものに拠った。

- (19) 原文は「文之體指實強弱」に作る。劉永濟氏『文心雕龍校釈』（一九六二年 中華書局刊）では『南齊書』陸厥伝に引く陸厥「与（沈）約書」に「劉楨奏書、大明體勢之致（劉楨 書を奏し、大いに体勢の致を明らかにす）」とあることから「文之體勢貴強」に作るべきであるとされる。今、氏の説に従って改めた。

- (20) 吳小平氏『中古五言詩研究』（一九九八年 江蘇古籍出版社刊）二五〇頁及び二五一頁の表を参照した。